

2003年はテレビ放送50年とのことですが、わが大阪教区の方も負けて？いません。

『大阪カトリック時報』2003年1月号に掲載された教区年間予定を見ると、あちこちの教会が50周年を祝うことがわかります。

今まで『大阪カトリック時報』に連載されていた「教会—こういふうにできている」設備管理編では、後半何回かにわたって聖堂新築工事に関する質問への回答が続いていましたが、なるほど、そういう時期なのだ、と納得させられます。

聖堂の新築工事を進める事務手続きについてのべた設備管理編をフォローするかたちで、2003年春から大阪教区典礼委員会が『大阪カトリック時報』に連載した原稿に若干加筆して、本ホームページに転載いたします。

じっさい、改装・改築された、ピカピカの聖堂を見てうれしくないという人はいないでしょう。

でも、耐震構造や身障者対応など、現在の建築基準を考慮すればどうしても今までどおりのまま、というわけにはいきませんし、聖堂内のデザインも、これまでなじんできたものとはずいぶん違ったものになってしまうことになるでしょう。

そこで問題になるのは、では「どんな風に変える」のか、ということです。

できるだけ「今までどおり」という線でがんばるのか、それとも現在の典礼に「ふさわしい」聖堂となるように、精一杯くふうしてみるか……。

どうでしょう、この機会に、後者についてごいっしょに考えてみませんか。

「なんでこんなややこしい聖堂のかたちにしてしもたんや。前のままの方がよっぽどよかったのに。あーあ……。」

でも、ちょっと待って。

それはただ単に「ややこしく」なったのではなくて、ちゃんとした意味や理由があってそうなったのかもしれない（もちろん、そうでない場合もあるわけですが）。

これから一年間にわたって、わたしたちがめざすべき典礼と、

それにふさわしい「場」としての聖堂について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

教会は月に4日しかない、といわれます。

いや、たまに5日あるかな。

ほとんどの人は日曜日（主日）にしか教会を訪れないし、それ以外の平日に自分たちの教会がどんな風になっているかほとんど知らないといえるのではないのでしょうか？

では、たまの主日をわたしたちは、どんな心構えで迎えているのでしょうか？

教皇ヨハネ・パウロ2世は使徒的書簡『主の日』で、次のようにのべています。

ん！」といったのです。

パウロは「一致」に対して深いこだわりを示しています。

「あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」（同11章26節）。

この「食事」はキリストの死から復活への過越秘儀を「想起」するものであり、ここで実践される「一致の交わり」がキリスト者の生き方の「規範」そのものである、と考えていたためでした。

それは、「罪人」と呼ばれた人びとと共食されたキリストの、あの生き方です。

キリスト者の「集い」の場は、「一致」をめざすものでした。

ところで、この時代はまだ、今のわたしたちが考えるような「聖堂」というものはありませんでした。

建物は「生ける神の神殿」（Ⅱコリント6章16節）である共同体の、いわば「影」のようなものでしかない、とさえ考えられていたようです。

つまり、だれかの家の大広間や、屋外にある広場などを提供してもらって「集い」がもてれば、それで充分だったのです。

事実「家の教会」ということばがあったほどなのです。

「私たちには（異教徒のように）神殿も祭壇もない」ことをむしろ誇りにさえ思う——それが、2～3世紀ごろの「教会」だったのです。

ところが、コンスタンティヌス帝がキリスト教の禁教を解いた4世紀頃から、いろいろな変化が生じるようになってきます。

ネコもシャクシも、というとなんだか怒られそうですが、皇帝がキリスト教を認めたと知るや、たくさんの人たちがこぞって「集い」に参加するようになりました。

それは、これまでの迫害時代は何だったの、といたくなるほどでした。

それだけたくさんの人が「集い」に参加するとなれば、今までのような一般の住まいでは皆が入りきれません。

そこで採用されたのが、立派な、宮廷様式の建物です。

これを「バジリカ」といいます。

縦長で、円柱の列が内部から両側を支えている、壮麗な建物でした。

はじめの頃は木製の小ぶりな「食卓」が使われていたようですが、やがて石でできた立派な「祭壇」に取ってかわられるようになりました。

それだけではありません。

建物に見合うようにと、行列行進に用いられる灯りや香の使用など、宮廷で見られたさまざまな要素が、聖堂の中に入りこんでくるようになりました。

おっと、今うっかり「聖堂」ということばを使ってしまうましたが……。

この頃からの聖堂の「変化」について、もう少し考えてみることにしましょう。

バジリカ様式の建物の中で「集い」がもたれているようすをちょっと、想像してみてください。

………壮麗な建物の向こうでは、いわゆる「司式者」が「祭壇」をはさんで会衆を前にしています。

その席は後陣にあって、その建物ではこれまで「裁判官」(!)がましましていたところです。

そして、その両側を「長老」たちがずらりと取り囲んでいます。

………どうでしょう？

これまでの「家の教会」に比べると、この「司式者」にそのつもりがなかったとしても、なんだか「距離感」をおぼえませんか？

それに加えて、宮廷様式も大きな影響をおよぼしていきます。

礼拝にかかわる所作や衣服など、およそ目に見えるさまざまなものに「芸術的」で「ゴージャス」な、宮廷を連想させる要素が加わり、ますます変化していきました。

壮麗な建物もけっこう、礼拝に訪れたその場所で荘厳な雰囲気にはたれるのもまた、一興。

しかしそうになると、パウロがあればほど目クジラを立てて主張してきたことはいったいどうなったのでしょうか………？

パウロにとって、キリスト者の交わり、一致した集いそのものが「キリストのからだ」でした（Iコリント12章12～31節）。

ところが、距離感はやがて一体感を失わせ、「集い」への参加意識は希薄になっていき、ついには人びとを単なる「お客さん」にしてしまいます（前にのべた、映画館のたとえを思い出してください）。

こうなると、「自分たちが『キリストのからだ』だって？ そんな、めっそもない！」ということになってしまいます。

「『キリストのからだ』なら、ほら、あそこにありますよ。あの遠い聖域で司祭が掲げている、ほら、あれ。………見えますか？」遠巻きに眺めて崇め奉るものとしての「聖体」理解まで、あとほんの一步です。

建物（容れ物）をうんぬんする前に、まず、内容（共同体）の充実を………という、かつて教会がもち続けたこだわりが、ここでずん、と響いてきませんか？

「ミサを遠巻きに眺めるような聖堂」になれてしまうと、人はやがて次のような感じになってしまいます。

（遠くて何をやったはんのか皆目わからへんけど、神父さんがなんや有難いことしたはるのには違いないやろ。ブーツとしててはもったいない、こっちはこっちでロザリオのお祈りでもさしてもろとこか）

………これでは本来あった「集いの場」の意味が、まったく失われてしまいます。

そもそもは「建物」よりもまず「集まり」ありき、のはずでした。でもさまざまなプロセスを踏むうちに、とうとう「建物」の方が「集まる」人よりも優先されてしまい、結局このような参加意識？を生むにいたったのです。

そんな雰囲気「待った！」をかけて、教会に「見なおし」をせまったのが、第2バチカン公会議だった、というわけです。

『典礼憲章』は、すべて典礼行為は「一致の秘跡」であり「キリストのからだ」である教会全体の（26項）「わざ」（7項）である、とのべています。

だからこそ、そこに集まるすべての人に「行動的な参加」（30項）が期待されているのです。

つまり、聖堂は「劇場」のようなものであってはならないし、参加者も「観客」のようであってはならない、というわけです。

さあ、ここでようやく、聖堂という「場」の本来的なあり方についてじっくり考えることができそうです。

「主の日」に集うわたしたちが、ひとりも「お客さん」にならずにすむ聖堂の構造……。

司祭であるキリストと、そのからだであるわたしたち教会がひとつになって典礼をささげている、という実感がもたらされるような聖堂の構造……。

遠くから、祭壇をほれほれしながら「眺める」のではなく、目の前でそれを「囲んでい」と体感できるような、聖堂の構造……。

これからは具体的に、こうした諸要素が反映できるような聖堂のくふうについて、あれこれ考えていきたいと思えます。

聖堂や設備のあれこれを具体的に取り上げながら、典礼的にふさわしいあり方を考えていくことにしましょう。

聖堂になくてはならないものは何でしょう？

この質問に答えるためには、まず、「聖堂」がどのような場であるのかを確認しておく必要があります。

聖堂の役割は、大ざっぱに言って二つあります。

- 1.キリストご自身が食物（聖体）となってわたしたちにふるまわれる場。
- 2.キリストの死と復活の神秘（過越秘儀）をともに味わい、感謝をささげる場。

そこでまず必要になってくるのが、最後の晚餐を記念する祭儀になくてはならない、祭壇です。

祭壇は「主の食卓」であると同時に、「生きた石」（1ペトロ2・4、エフェソ2・20参照）である主キリストが、私たちとともにいてくださることを示す、目に見えるしるしでもあります。

ですからこの祭壇の上に置かれるパンとぶどう酒が、聖堂内のどこからでもよく見えるように配慮することは、とてもたいせつなことだといえるでしょう。

ところで「食卓」＝テーブル、という発想からでしょうか、しばしばパンとぶどう酒以外にいろんなものがごちゃごちゃと祭壇の上に置かれてしまっている、ということがありませんか？

ろうそくやミサ典礼書はともかく、生花にマイクスタンド、聖歌集に「聖書と典礼」、ファイル類やメモ用紙、などなど…。

これらがパンとぶどう酒とともによく見えてしまうと、典礼の中心がわかりにくくなってしまいます。

祭壇は「聖堂に置いてある大きめのテーブル」ではありません。「生きた、かなめ石」であるキリストが、ご自身を「取って、食べなさい」と私たちにさし出してくださることを、はっきりと目に見えるかたちで表しているのが祭壇なのです。

このことは、ミサが行われていないときでも、忘れないようにしたいものです。

結婚式の儀式書に「署名は祭壇の上で行わない」と明記してあるのも、このためなのでしょう。

祭壇に続いて、朗読台についても考えてみたいと思います。

教会は朗読台を「神のことばの食卓」と呼んで、たいせつにしてきました（「啓示憲章」21項参照）。

ことばの典礼において、会衆はここから神のことば（聖書の朗読、答唱詩編、説教など）を「食物」として「いただく」からです。

ですから、聖堂内では朗読台の位置についても、よく配慮しておかなくてはなりません。朗読奉仕者が会衆からよく見え、またそのことばがよく聞きとれるようであればなりません。

可能ならば、朗読聖書を置く台が動かせたり（それによって、開かれた朗読聖書を会衆に示せるようになる）、おとなだけではなく子どもや高齢者など、すべての朗読奉仕者が同じ朗読台に立てるよう、踏み台を用意するなどのくふうがあればなお、いいでしょう。

ただ、いくら「よく見え、よく聞きとれる」からといって、先唱やお知らせを朗読台からするのはふさわしくありません。

「神のことば」を告げ知らせるといふ、朗読台本来の意味からはずれてしまうからです。また、キリストのからだをひとつの「食卓」（祭壇）からいただくように、神のことばもひとつの「食卓」（朗読台）からいただくようにするのが自然です。

旧約聖書や書簡の朗読と、福音朗読とがそれぞれ別の朗読台からなされては不自然でしょう。

朗読台はあくまでもひとつでなければなりません。

さて、キリストのからだの食卓（祭壇）にろうそくが用意されているなら、神のことばの食卓（朗読台）にもろうそくを用意できたらいいですね。

伝統的に、福音朗読のときは、助祭あるいは司祭の両脇に火を灯したろうそくを奉持する奉仕者（侍者など）が脇に立つことになっています。

5世紀のヒエロニムスは、福音朗読のときのろうそくの灯は喜びのしるしだと書いています。

ろうそくの光によって、ことばの典礼の焦点が、目に見えるかたちでいっそう強調できるようになると思うのですが。

次は聖堂内の十字架についてです。

今でこそ、十字架といえばキリスト教、キリスト教といえば十字架…というぐらい、聖堂に十字架があるのが当たり前のようになっています。

しかし、十字架上で磔（はりつけ）にされているキリスト像が見られるようになったのは、七世紀の終わり頃のことです。

十字架というシンボルがはじめて現れるのは4世紀頃のことだといえますので、比較的あとの時代ですね。

それまでは、よい羊飼（キリスト）や、祈りをささげる女性の姿（教会）などさまざまなシンボルが描かれていました。

今では十字架、とくに磔刑のキリスト像は、わたしたちに救いをもたらす「主の受難」を思い起こさせるものとして、欠くことのできないものになっています。

でも、ミサがキリストの死と復活の過越秘義を記念するものであるという理解から、聖堂内に固定された十字架へのこだわりは少なくなってきました。

ミサ典礼書の総則（2002年版）によれば、十字架はミサが行われるたびに奉仕者が持ち運び、祭壇の上に置くか、そばに立てることができる、となっています。

それは、行列をとおして「受難の主は、常にわたしたちとともに歩んでくださる」ことを思い起こすため、また、ミサ全体の「流れ」のなかで、過越のできごとの頂点が何であるかを体験できるようにするためでしょう。

もちろん、固定された十字架がダメだ、といっているわけではありません。

しかし、キリストの受難・復活・昇天を記念するためには、つねに「動き」をとめないながら、その救いのできごと全体を体験していくことが重要である、ということをお忘れしないようにしたいものです。

固定されたままのシンボルによって、つねに救いのできごとの「部分」しか想起できないというのであれば、いささか足りないような気がします。

聖堂新築の計画のある教会では、行列用の十字架を設置できるように、ぜひご一考ください。

続いて聖櫃（せいひつ）について考えてみたいと思います。

聖櫃のそもそもの起こりは、主の日の集いに参加できなかった病人のために、後でパンを運ぶことができるようにと貯えておいたことに由来します。

その「貯蔵庫」がやがて、食物としてふるまわれるはずのパンを眺めて礼拝するための対象にされてしまいました。

それは以前紹介した聖堂の構造上の変化とも関係があるでしょう。

もちろん、聖体を礼拝の対象にするな、といっているわけではありません。

しかし典礼の「流れ」のなかでは、聖櫃のなかに「保存」されている聖体と、主の日に食卓（祭壇）を取り囲んで「キリストのからだ」となる共同体と、どちらが重んじられるべきなのでしょう。

祭壇から供されるキリストのからだと血をいただいて「ひとつのからだ、ひとつの心」（第三奉獻文より）となった「神秘体」（＝教会共同体）の一人ひとりこそ、たがいに大切にされなければなりません。

敷地や建設資金に余裕のある小教区なら、礼拝所を設けて別のところに聖櫃を置くこともできるでしょう。

しかし、そこで「個人的な礼拝」がなされるばあい、それがあたかも感謝の祭儀に「集う」のと同様であるかのように見なされないよう、注意したいところです。

たとえるならば、レストランに入って、ショーウィンドウに飾られているお料理の見本だけを眺めて帰る人はいないでしょう、ということです。

見本ではなく、本物を「食べる」ことができこそ、人ははじめて満足できるはずだからです。

聖体賛美式の緒言にも、「この秘跡を食物、いやし、助けとして制定されたキリストの意向が不明確になるような仕方や飾りつけなどは避けなければならない」（82項）と、はっきり記されています。

こうして考えてみると、わざわざ別に礼拝所を設けなくても、聖櫃は祭壇から離れたところ、しかもできるだけ正面からずらした、脇の方に設置するのがよさそうです。

最後に、告解場のことについてお話ししましょう。

……と、書いておきながらこんなことをいうのもなんですが、いまだに「告解場（室）」という表現で「ああ、あれね」と、話の通じるのが悲しいところでもあります。

それは、「ゆるしの秘跡」の意味が今もって浸透していないことを意味しているからです。多くのばあい、ただ単にこの秘跡の呼び方が「今風」になっただけ、ぐらいにしか考えられていないのではないのでしょうか。

罪の告白（告解）は、神から「ゆるし」をいただいたというよろこびにあずかり、これから回心（悔い改め）して生きるための、あくまでも「第一歩」にすぎません。

この秘跡の「流れ」をひとつの場で全体的に実感しようと思ったら、カーテンで仕切られた暗くて狭い部屋がほんとうにふさわしいものであるかどうか、ということを考えなくてはならないでしょう。

暗いところから出てきて、ああやれやれ、お勤めを果たした、では困ります。

最近では、聖堂内に応接間を連想させるような部屋をもうけて、司祭と向かい合って「ゆるしの秘跡」にあずかれるよう、くふうしている教会もあるようです。

ただ、従来のイメージからはずいぶん明るくなりすぎて、「なんや落ち着かへんな……」と、違和感をおぼえる方もおられるようですが。

そのためにも、ここはあらためて「ゆるしの秘跡」の意味ややり方など、みんなで再確認しておく必要があるでしょう。

世代によって、この秘跡に対する考え方がずいぶんまちまちであったりします。

司祭が「悔い改めの祈り」といっても通じないので、「痛悔の祈り」とあわてて言いなおしたり……。

教会が現在のような「過渡期」にあるばあいは、跪いてもよし、司祭と向かい合ってもよし、というぐあいに、選択の余地をもうけておくほうがいいかもしれません。
外的なことよりもまず、秘跡の意味と内容をよく理解することの方が先決でしょう。